

ロシアの生んだ世界的チェリスト マエストロ・ロストロポーヴィッチ



2000年2月 国立小児病院にて

20世紀最高のチェリストの一人といわれるムスティスラフ・ロストロポーヴィッチ氏。力強く、感情を前面に出す演奏を特徴とし、その幅広いレパートリーと変幻自在な演奏法は、ペガサスが大空を駆けめぐるようだと言われる。意欲的な演奏活動で世界中の人々を魅了し続けるかたわらで、1992年には、医療援助を目的とする「ヴィシュネフスカヤ・ロストロポーヴィッチ財団」を設立。その連名の通り、世界的ソプラノ歌手で波乱の人生をともに闘ってきた同志ガリーナ・ヴィシュネフスカヤ夫人との共同設立である。

この財団は、米国をはじめとする世界中の医療関連企業から支援を受け、ロシアの子どもたちに医療援助を行っている。この財団によって、激変するロシア経済の中で手つかずのまま放置されている小児医療の分野で、医療機器や医薬品が各病院、施設に寄贈されるほか、ロシアの小児科医の教育研修にも力が注がれている。1998年6月にロストロポーヴィッチ氏がブルゴーニュのフォントネ修道院でコンサートが行われた時に、シャトー・ド・シャイのホテルに一泊されたご縁から、その後、弊社長佐多保彦との親交が始まり、結果、本年5月1日より本財団理事に招かれ、また(株)東機買は、本財団の日本での事務局を務めることになった。

実際にお会いしたロストロポーヴィッチ氏は、その演奏のように情熱的で力強く、そこにお茶目な温かいお人柄が加わる。1927年、アゼルバイジャンの首都バクー生まれ。父親がロシア有数のチェロ奏者だったこともあり、この美しい音色の楽器を自然に手にとるようになった。「子どものころは練習をするように言われても、両親が出かけてしまうとすぐにやめてしまって、窓から両親が帰ってくるのが見ると、あわてて弾き始めました。弾き疲れているように見せるのに苦労したものです」身ぶり手ぶりをまじえてユーモラスに語る。それでも14歳でモスクワ中央音楽院に進学、18歳で全ソビエト音楽コンクールで優勝すると、ブラハ、ブダペストなどの国際コンクールでも次々と賞をとる。その後、30歳の若さで中央音楽院の教授に就任した。

ロストロポーヴィッチ氏はまた、『収容所列島』で知られるノーベル賞作家ソルジェニーツィン氏をかぐまい、旧ソ連政府に公然と反抗したことも知られる。「1968年からの5年間、私の家でいっしょに暮らしました。反体制のレッテルをはられ、とても人間の生

活とは思えない暮らしを強いられていたソルジェニーツィン氏を家に迎えることは、人の道として、むしろ当然のことでした。」

それ以後、自らの良心を信じ尊ぶ心は、人生を通じての生き方の指針となる。政府の弾圧に屈しないため、国家の敵とみなされたロストロポーヴィッチ氏は、1974年、遂に夫人と共に、祖国と全財産を捨ててロンドンに旅立つことになった。1978年、国籍剥奪。ゴルバチョフ元ソ連大統領が国の誤りを認め、再び祖国に足を踏み入れた1990年までの16年間、一度もその信念を曲げたことはなかった。

その強さ、情熱は、どこからくるのだろうか。「それは良心、やましさのない心でしょう。人には必ず自分の行為を問い直さなければならぬときが来る。自分は正しかったと信じている人にとって、良心は力を与えてくれるものなのです。」1989年11月、ベルリンの壁崩壊時には、チェロ一つを抱えて駆けつけ「壁を越えて、生活と希望を持ち込んだすべての人々のために」と言って、崩される壁の前で演奏をした。

現在ロシアでは、新世紀を担う子供たちの健康が危機にさらされている。財団では、賛同する世界中の企業、慈善団体、医療機関から支援を受け、ロシア国内の小児病院に医療機器類、医薬品、食品、医療教育を提供している。「無力な子供たちが、命を維持するための最低限のケアも受けられずに苦しんでいます。たった一台の人工呼吸器で、たった100gのワクチンで(それがなければ、死んでいったであろう)多くの子供たちを救うことができるのです。」21世紀を予測して、新しい時代、新しい人間関係のターニング・ポイントになるだろう、と語る。

「これまで、一つの国が独立した一つの家族のようなものでしたが、21世紀には、世界は一つ、すべての国が、この地球という家に住む一つの家族になるでしょう。すべての国の人々が肩を触れ合うようにして暮らす社会では、これまでとは違った価値観が生まれるはずで、私もこの新世紀を生きる若い人たちに力を伝えたい。生きている限り、走り続けて、彼らにバトンを渡したい、と思っています。」